

今月の一枚

軽井沢の冬～光の散策 細江久美子（撮影・文）

澄んだ夜空に広がる星空と幻想的な灯りと光のコントラスト。静寂な夜の軽井沢をあたたかく照らしてくれます。軽井沢の長い冬の始まりです。



今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

九月の風

黒田 三郎

ユリはかかさずピアノに行っている？
夜は八時半にちゃんとねてる？
ねる前歯はみがいてるの？
日曜の午後の病院の面会室で
僕の顔を見るなり
それが妻のあいさつだ

僕は家政婦ではありませんよ
心の中でそう言って
僕はさり気なく
黙っている
うん うんとあごで答える
さびしくなる

言葉にならないものがつかえつかえのどを
下ってゆく
お次はユリの番だ
オトチャマいつもお酒飲む？
沢山飲む？ ウン 飲むけど

小さなユリがちらりと僕の顔を見る
少しよ

夕暮れの芝生の道を
小さなユリの手をひいて
ふりかえりながら
僕は帰る
妻はもう白い巨大な建物の五階の窓の小さな顔だ
九月の風が僕と小さなユリの背中にふく

悔恨のようなものが僕の心にくじく
人家にははや電灯がともり
魚を焼く匂いが路地に流れる
小さな小さなユリに
僕は大きな声で話しかける
新宿で御飯たべて帰ろうね ユリ

黒田三郎詩集「小さなユリと」より

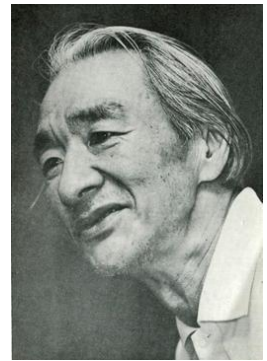
戦後詩というものにはじめて出会ったのは、高校生の頃。それが黒田三郎の「紙風船」であった。「紙風船/落ちてきたら/今度は/もっと高く/もっともっと高く/何度でも/打ち上げよう/美しい/願いごとのように」という詩だ。

その後、『ひとりの女に』や『小さなユリと』に出会い、思潮社版の現代詩文庫で黒田三郎の全体像を目にすることになる。平易な言葉を使いながら、感情の陰翳を洗練された表現にする、それがとても新鮮であった。

やがて私は、やさしい言葉の背後に、「熱帯の島で狂死した友」「左の肺を半分切り取られた僕」の過酷な体験が横たわっていることを知ったのだ。彼の詩によって私は、表現というものの奥深さを意識するようになった気がする。

「九月の風」は、病気の妻を見舞いにいった「僕と小さなユリ」の姿が描かれている。そこには、死を間近に見つめたものの透明なやさしさが組み込まれているように思う。

黒田三郎 (1919 - 1980) 広島生まれの日本の詩人。戦時中、南洋の島々で過ごす。戦後、詩誌「荒地」創刊に参加。最初の詩集『ひとりの女に』でH氏賞受賞。詩集に、『小さなユリと』、『失われた墓碑銘』『もっと高く』など。



イベント情報

2020年度のイベントはコロナの影響で延期が続いていたが、コロナが当分の間続くと考え、リモートによる会を開催することにした。

第10回ワークショップ 2020.10.18 (土) PM.2:00~4:00

「多国籍化する学校Ⅱ」

講師：土田雄一（千葉大学教授）

司会：深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

今後、延期されたワークショップを以下の日程でリモートにて行う予定である。（発表のテーマは仮題）

第11回ワークショップ・オープン 2021.2.20 (土) PM.2:00~4:00

(2020.8.20に開催予定だった)

司会：明石要一（千葉敬愛短期大学学長）

①「子どもサッカーの世界」渥美卓哉（公立学校教諭）

②「コロナ禍の大学におけるメール相談の試み」小澤貴史（拓殖大学准教授）

③「アップライドドラマの可能性」成澤布美子（演劇実践家）

第12回ワークショップ .2021.5.8 (土) PM.2:00~4:00 (2020.5.9に開催予定だった)

「里子・里親問題を考える」

司会：石田祥代（千葉大学教授）

①「里子の自立の観点から」青葉紘宇（東京養育里親の会）

②「里子抱く共感性を巡って」深谷和子（東京学芸大学 名誉教授）

第13回ワークショップ・オープン 2020.8.14 (土) PM.2:00~4:00

司会：中山哲志（東日本国際大学教授）

①「伊良部島の子どもたち」外山千草（沖永良部事務所）

②「アナウンス学校の若者たち」清文枝（テレビ朝日アスク講師）

③「多国籍の子どもの指導を通して」萩原裕美（公立学校教諭）

なお、ワークショップは専門家を招いての子ども問題の勉強会だが、ワークショップ・オープンは他学会の研究大会と同じような会員の研究や実践を発表する場と考えている。

地域活動でできること、今年できたこと

大山光子（任意団体“がきんちよ”ファミリー 代表・こども支援士・
一般社団法人あだち子ども支援ネット 代表理事）

○はじめに

資格を持たない地域人が学生時代の取りこぼした疑問の解明に受講し始めたこども支援士での学び。その学びから多くの理解・納得と、あらたな現実対応との違いを味わいました。現在も放課後子ども教室実行委員長・小中学校開かれた学校づくり協議会会長、青少年対策地区委員会。過去に地区少年団体協議会・少年団体連合協議会・青少年委員・民生児童委員、その他、地域を土台とした様々なところでの子ども達と、多くの家庭に関わらせていただいています。

この数年、日々の生活の平静さを保つ為に無気力、無欲という選択をしているかに見受けられる家庭に出会っています。家庭内、家族内の平穏を演じ合っている様な家族です。

なぜ……。

社会では、発達障害・虐待・DV・ひきこもり・登校拒否・不登校・AC（アダルトチルドレン）、機能不全家族、ヤングケアラーなど言葉が独り歩きをしています。

言葉の深堀りをしたく、学びのテーマに取り上げ、まさにご自分の抱える困難と闘っている方々との対話の時間を設定し、感じている事、思っている事、考えている事を教えていただく活動を進めてきました。そして、つながる子どもたちの状況改善に寄り添うために。

○コロナ禍で！

恐怖とともに、平静という静かな時空を得た気がしました。自分の身を守ることで、やれることは僅かなことだと気づきました。生きていくのに必要な行動は、こんなにもシンプルだったと。学校への出入り、打合せ再開（対面・オンライン）、居場所事業、地域食堂（こども食堂）、食の分配、消毒液分配、あらたな地域交流スペースの開設と運営企画の実行、区内活動の連携拠点づくり、不登校支援、困難家庭へのサポート、相談対応など、出来る限りのことをいつもと変わらず動くことができました。

できあがった新たな拠点、民間の地域人と専門家集団ができることをそれぞれ持ち寄っての新しい知恵あるチームづくり。弁護士チームも加わりました。



○不登校の背景に……個別訪問から見える子どもたちの一部

- ・ 登校支援での状況確認の訪問で確認できたことは、家族全員が朝9時30分にまったりと家にいるという四世代生活。
- ・ 母親が家に在宅するも、子守り・子育てを担っている女子小学生、中学生の姿。
- ・ 障害青年の介助を叱られながら、親の代わりにする笑顔溢れる小学生。
- ・ きれいな外観とは裏腹な家庭内の荒れの中でランドセルを探すのに1時間かかる生活。
- ・ 「学校がつまらない」「勉強がわからない」以前の「人の中にいることの怖さ」
- ・ 同じ事を行動しなければならない不安と疑問

○発達障害とは？ 障害があるようなのでと言われた親たちの苦しみと怒り

本来、発達障害は先天的なものが大半をしめていることでしょう。地域で出会う親御さんたちの相談事の一つに就学時の学校選びがあります。ふつうに学校を選ぶことができる親子でなく、保育園・幼稚園・無就園（保健所の発育検診等に行政機関への相談を促された経緯あり）、小学校からの進路相談にて特別支援学級及び特別支援学校を進められた親子。進むべき先の学校の状況もわからずに、進学したら…させたら…、我が子の存在を消したくなったとの声。

発達障害という括りは、なんであったのでしょうか。

○レジリエンスを教えなかった社会と大人たち

豊かな安全・安心を求めてハッピー家庭が普通とした平成の時に、家庭からはみ出して自分のパワーと好奇心を外に向けた子ども達が「勉強は？」と言われない私たちの居場所に集まり始めたのが、すでに 20 年前。

家に居られない。食べてない。行くところがない。お金がない。何をしたいのかわからない。学校の先生に反発している。勉強しろと言われても、する場所もない。

教育委員会にかけあって、自由に入出入りできる、うるさい規則もない。地域のおばちゃんたちがおしゃべりしている場所を作りました。

様々な事が起き、自分たちで落ち着かせ、自分たちで場の自治を守るようになり、守れない行為をする者に、意見をする者が現れた。「食」も無ければ、あるもので工夫することが調理、料理だと。

「生きる為の工夫には、自分にも他にも向き合う強さが必要だった。ここがあって良かった。」と、成人して家庭を持った青年が言いました。

良くも悪くも、みんなで遊んで叱られて覚えたことが知恵になっていますと。

○おわりに

ある面、今の社会を揺れ動かしている NPO 活動とした非営利の立場の若者達と向き合いながら、昔ながらのボランティア型地域活動しかできないシニア層を巻き込んでの楽しい世代間交流の場づくりを通し、多文化共生コミュニケーションワークだとおもしろがって動いています。

「学校・地域・家庭」「障害・LGBT・外国籍・特定妊婦・里親・中途養育・機能不全家族・ひきこもり・犯罪など」人の生き様、生きづらさ、生きぬく力を感じる土台の視点に「こども支援士研修での気づき」があります。

今回、書き留めておきたいことがたくさんあり、テーマを示すと背景と状況説明を抜くことは誤解も生じることと考え、雑駁な活動の一端を文字にさせていただきました。

今後の動きとして、共生社会の原点に戻り、具体的には地域にたくさんの「ほっとステーション」を点在させる若者たちの応援をしながら、『一時立ち直りホーム（仮称）』を手にしたいです。

活動 HP “がきんちょ”ファミリー

<https://gakinncyo-fa.web.wox.cc>

一社) あだち子ども支援ネット

https://peraichi.com/landing_pages/view/kodomocienn2915

Adachi ちゃりネット

<https://sites.google.com/view/adachi-charinet/>

ドバイに暮らして

谷野敏子（元堺市教育センター所長・こども支援士）

小学校の教員からスタートして38年、今年の3月に定年退職して、夫の海外日本人学校勤務に同行し、ドバイで暮らしはじめて約4か月経ちました。

コロナ禍の関係で、4月着任の予定が延び、8月1日にエミレーツ航空でここドバイに降り立ちました。砂漠の中に立ち並ぶビルディングの数々。蜃気楼のようにも見えました。また、町中のいたる所に工事がストップしているビルがあり、今年予定していた万博が1年先に延びたとはいえ、どのビルも全て最後まで出来上がるのか心配になるほどです。



○ドバイについて

アラブ首長国連邦は1971年にイギリスの保護領から独立したアラブ人の国で、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、フジャイラ、アジュマン、ラス＝アル＝ハイマ、ウム＝アル＝カイワインの7つの首長国からなる連邦です。日本大使館は首都アブダビにあり、ドバイには総領事館があります。

ドバイの人口は、約333万人（2019年）で、インド・パキスタン人が一番多く、その他湾岸諸国、アジア、アフリカ等からの出稼ぎ労働者であふれています。そのためか、街で見かける人は男性が圧倒的に多いです。アラブ首長国連邦の純粋な国籍を有する人（エミラティ）は、1割程度だと言われています。現在、ドバイには、中東・アフリカ地区の中では最も多い3,147人（2018年10月1日現在：ドバイ総領事館管轄地域内）の日本人が住んでいます。商社等の勤務の方が多く、5年未満で異動される方がほとんどのようです。連邦として一国の形態をとってはいますが、ドバイはドバイ、アブダビはアブダビで「国」は異なるという意識が強く残っているとされています。コロナ禍の対応も全く違っていて、11月1日現在ドバイとアブダビの間を自由に行き来できない状況です。

○言語

公用語はアラビア語ですが、ほとんど英語でのコミュニケーションです。しかし、様々な国籍の人達が独自の英語を話すため苦勞することもあります。還暦を過ぎて聞き取りも遅く、発音もうまくない私には、書いた英語のほうがまだ理解できるのですが、反対に各国からの労働者の方は、英語を話せるけれども十分には書けなかったり読めなかったりする方も多く、英語もよく使う言葉でないと通じないことがあります。携帯の翻訳ソフトや翻訳機を駆使しながら、対面ではやはり直接の会話で相手を見て、中学校までに学んだ簡単な英語でジャスチャーを交えながらのほうがよく伝わります。親切な方が多く、一生懸命に理解しようとしてくれます。ありがたいことです。最近わかってきたことですが、日本では「人の話は最後まで聞く」のがルールですが（と思っているのですが）、ここでは、自己主張が大事です。相手の話を最後まで聞いているなんてあなたは何も考えてないの？となります。話の途中でであろうが、自分の聞きたいことを聞いたり、伝えたいことを言ったりする方が結局ちゃんと伝わります。「多分通じただろう」では、何も通じていないことがよくあります。きちんと「○○してほしい」とどしどし言わないといけません。そして、それはルール違反でもなく、相手がそれで気分を害することもないようなのです。

○日本人の子どもたち

私たちが来た8月といえば、ドバイは灼熱の土地。毎日40度を超える気温で、まるでサウナの中を歩いているようでした。人の動きも夕方から活発になります。買い物に行っても午前中は人も少なく、開いていない店もたくさんあります。出来立ての食パンを買おうと何度行っても「まだないよ。午後4時ごろかな。」と言われます。夕方になると街に人が湧いてくるようで、モールには多くの人が集まります。子どもたちの姿もコロナ禍の前までは、午後9時10時ごろまでたくさん見かけたそうです。日中に出歩かないため、ビタミンD不足になるということで、ビタミンD入りのミルクや玉子などがたくさん売られています。

この暑さの中で子どもたちはどんな風に過ごしているのか気になって、小中学生の子どもさんを持ち、ドバイに住んで4年になる日本人の方に聞いてみました。

やはり4月から11月ごろまではとても暑くて、子どもたちも、外に出て遊ぶことは難しいようです。暑さだけでなく、通学もスクールバスで距離も離れていて、歩いて友達の家遊びに行くわけにはいかないからです。

同じレジデンス（広い賃貸マンション）に住んでいる子ども同士で遊ぶときは、バスを降りたときに「今日、一緒に遊べる？」と聞き、保護者が「OK」となれば、レジデンス内の友達の家に行き遊びます。相手の子どもが「今日はAちゃんと遊ぶから」などということもあったり、保護者間の人間関係もあったりして、うまく成立しないときも多々あるようです。ほとんどのレジデンスには、プールやスカッシュコート、ちょっとした遊び場がついています。ドバイにはほとんど雨が降らないので、プールは屋外にありますが、子どもたちは長い期間プールで遊びます。

同じレジデンスではない友達と約束するときは、学校で「今度いつか遊べる？」と聞いて「家に帰って、聞いてみる」となります。家で「○日なら行けるよ」と言われると、事前に保護者が違うコースのバスに変更して、その日は朝から遊ぶ準備も持って、学校に行きます。帰りは約束した友達と一緒に帰ってその友達の家で遊びます。時間を決めておいて、保護者が迎えに行きます。ほとんどは車ですが、メトロ等の場合もあります。なかなか面倒な感じです。保護者も大変ですが、ほとんどの家庭が共働きをしていないので、こういったこともできるのでしょう。

また、仲良くなってくると多いのが、「お泊り遊び」だそうです。木曜日に（ドバイの日本人学校ではイスラムの休日に倣って金曜日・土曜日がお休みです）、お泊り道具を持って登校し、事前に変更したスクールバスに泊まる友達と一緒に乗って帰るのです。そして、友達の家で遊んで、泊まって、翌日の金曜日は、学校のバスケットクラブや習い事に一緒に行き、そこに保護者が迎えに来るといったパターンだそうです。ただし、いつも行かせもらうばかりともいえないので、自宅にも誘うように心がけているそうです。

中学生になっても、子どもだけで出かけて遊ぶことはほとんどなく、保護者と一緒に大きなモールで集まり、モールの中で子どもだけで違うお店でランチをするぐらいだそうです。

ここドバイでは、子どもたちの遊びには、保護者のサポートがなくてはならないものだと痛感しました。また、保護者同士の関係がそのまま子どもたちの友達関係にもつながっていくようです。保護者同士の気が合わないと、そもそもお泊り遊びには進みません。自分の子どもが約束してこられないタイプだったら、保護者同士で相談して、子どもたちを会わせる機会をつくってあげないといけないのです。実際に、保護者同士が連絡を取り合って、大きな公園やプールなどに集まり遊ばせることもよくあるそうです。

ただ、コロナ禍の現在では、公園なども閉鎖されていて、子どもたちもまだ十分に遊べる環境にはありません。常に大人の管理のもとで、人間関係をつくっていく放課後の子どもたちが少し気になります。

そんな子どもたちにとっては、学校での休み時間が唯一友達とすぐに遊べる時間だといえるのかもしれない



(真ん中の掲示はお祈りの時間を知らせている)

ません。ここドバイの日本人学校では、4月からずっとオンライン授業で、8月末からやっと分散登校が始まり、11月から全員登校となりました。隣の首長国アブダビは翌1月からだと聞いています。学校が再開して、まだまだ暑い日（30度超えています）でも、校庭で走り回って遊ぶ子どもたちの姿があると聞いて、少し嬉しくなりました。

まだまだコロナ禍で、学校への自由な立ち入りも許されていない状況ですが、少しずつ事態が好転したら、私も読み聞かせや学習支援などのようなボランティアができればいいなと思っています。

風の本棚

BOOK
1

青葉紘宇著「^つ継ぎ^は接ぎ家族」を楽しむ

—古川柳の子育てから学ぶ家族の姿（2020年10月 グッドタイム出版）
石田祥代（千葉大学教授）

古川柳のなかで描かれる子どもの姿や親の苦労が、実子と里子を育ててきた筆者の目を通して解釈され、温かく解説されている。子どもの可愛さだけでなく、子育ての苦労もそこかしこに見られ、いつの時代も親が一生懸命に子どもに向き合っていることが分かる。限られた文字数で子どもや親の姿が表現されている川柳だからこそ、一つひとつの川柳に子どもとの関わりがぎゅっと詰まっている。

本書は四章から構成される。「子育ての風景」では、一番初めにハラハラする川柳が置かれている。その川柳を通して現在の里親が抱える養育課題が提示され、読者自身もこれまでの子育てや周囲で見聞きしたことを思い返す機会が提供されている。この章ではまた、地域の人たちが折檻を止めに入る川柳がいくつか紹介されている。現代にあっては隣の家であっても子育てに口出ししたり、若い親を年輩者が諫めたりするのが難しい社会になっているが、先人たちのみんなで子どもを育てる姿勢は今こそ見習うべきではないかと改めて考えさせられる。

「子どもの世界」では、成長に伴い子どもが表す、大人から見れば困った行動が語られている。私自身も体験したことのある子育てにまつわる親の苦労や忍耐には共感を覚えた。一方で、当時は少なくなかった継子や里子に関係する川柳とその解説では、親子と家族についての諸問題が示され、読者は自らの家族観を問われるであろう。この他、「ドラ息子と巣立ち」、「子育ての光と影」の二つの章があるが、本書では、必ずしも最初から読み進める必要はない。読者が関心を持った章から読んでも良いし、その日に気になった川柳とその解説をみるという読み方もあるだろう。

川柳の間に織り込まれている里子の言葉〈点描〉とその解説では、現在の日本社会で逞しく生きている里子の姿が浮き彫りにされており、過去に生きていた子どもたちと現代に生きる子どもたちがここでも「継ぎ接ぎ」されている印象を受けた。



時代の変化が激しく、混沌とした現代において、教育に携わる人たちは、「どのような教育をしていくべきか」という問いを常に抱いているのではないだろうか。本書はその問いに一つの道筋を示してくれる一冊である。教育を行う場である「学校」と、教育を行う「教師」、そして「授業」について、著者の豊富な実践と鋭い観察眼からそれぞれの本質に迫りながら丁寧に語られている。「教育の本質」に目を凝らし続けた著者の凄みは、私自身が教師であるからこそ感じ得られたものもあると考える。今回は私が本書を読んで感じたことを教師の視点から述べていきたい。

著者は坂東克則氏である。神戸大学教育学部を卒業後、京都教育大学にて重複障害教育を学び、神戸市立特別支援学校、小学校教諭を経て、神戸市立福住小学校長、山田小学校長・山田幼稚園長を兼務し、2018年に退職後、兵庫教育大学大学院に進学し、現在は教育哲学を学んでいる。

○学校教育の核となるもの

「教育のマニュアル化」著者は現代の教育をそう表現している。そして、「誰もができ、誰もが失敗しないよう、マニュアルが細分化され、マニュアルが教師を縛っていく」と綴っている。その実態の要因として著者は、「与えられ続けている学校」について指摘している。どういうことか。学校は保護者・地域の要望やそれらに対する説明責任、文科省や教育委員会からの通達や調査・報告など、外部からのあらゆる要求が増え続けているのが現状である。それにより学校の意識は外向きになっているのではないかと本書を読んで改めて感じた。そして、学校は自分たちが一番大切にすべきことに力を注ぐことができているのではないかとも感じた。それは何か。「授業」と「子ども」である。多忙により効率化・形式化された授業(実際授業準備もままならない)や校内研究会、そして学校教育では大人の都合が優先されている。

しかし、著者は山田小学校で「授業づくりを核とした学校づくり」という信念のもと、授業改革を断行した。それは、どこの学校でも行われている形式的な授業研究ではなく、当時校長である著者自身が授業を行ったり、学級の授業に「介入」したりすることで、よりよい授業を徹底的に追求するものであった。そして年齢や経験年数を越え、よりよい授業をつくるために語り合う教師集団が形成された。

ここで実現されたことは、これからの教育にとって非常に重要なことを示唆していると私は感じる。「授業」それは「教師の専門性」を示すものである。もう一度、我々の学校教育は山田小のように教師が専門性をいかんなく発揮できる環境と教師同士の関係をつくっていく必要がある。

私も東京都の教師道場という研修で2年間の集中的な授業研究を同年代の仲間とチームを組んで行った。山田小のように、「授業」についてとことん語り合った。その語り合いの中心にあったのは、「子ども」であった。授業での子どもの表情や思考の流れ、教師と子ども、子ども同士のやりとりなど、そこからよりよい授業を追求していった。山田小の発問研究と教材研究の深さは本当に素晴らしいと感じた。さらに授業時の子どもの様子や反応について、もっと知りたくなった。「授業」を教師たちが互いに語り合い創りあげていくことはとても大切なことである。「教育は創造できる」そう語った著者の言葉は、目新しいものを求めてはいない。今の学校教育の中にある、内なるものからの創造である。それは、変化の激しい混沌とした現代において、学校教育の本質に我々を導いてくれるきっかけとなるだろう。

今回は、授業についてのことしか述べられなかったが、本書では他にも、著者が主催していた「又新の会」や、「手紙」として発行していた校長だよりなどで語られたことが記されている。教師としてはっとさせられることや、私が無意識的に行っていた教師の行動や思考について明文化されていて、思わず感嘆の声をあげてしまったものもあった。本書は、あらゆる角度から「教育の本質」に迫るものであり、私のこれからの教師人生において、糧の一つとなる一冊となった。

本文だけで全 11 章 416 ページという大部の書である。簡単な紹介と、私が選択したキーワードから、少し持論を展開したい。

スコット・ギャロウェイは、本書によると、ニューヨーク大学スターン経営大学院教授であり、MBA コースにてブランド戦略とデジタルマーケティングを教えているということである。

G A F A については、1 社ごとに章立てをして次のように紹介をしている。

G グーグル(第 5 章—全知全能で無慈悲な神) 我々の知識の源

A アップル(第 3 章—ジョブズという教祖を崇める宗教) 歴史上最も利益の大きな企業

F フェイスブック(第 4 章—人類の 4 分の 1 をつなげた怪物) 人類史上最も成功している企業

A アマゾン(第 2 章—1 兆ドルに最も近い巨人) 世界中から選ばれつつあるネットショッピング企業

()は章のタイトルで、その右は、第 1 章「GAFA—世界を創り変えた四騎士」に書いてあることである。本書では 1 社ごとに、その成り立ちから成功までも記している。

タイトルにある「創り変えた世界」として、変化の例を挙げている。アマゾン・ゴーでは、実店舗ビジネスとしてレジを通さないで店を出ることができる。アップルが史上最も利益を上げている企業の一つである要因は、製造ロボットの重視、世界的なサプライチェーンの確立、サポートと IT 専門家の力を背景としていること、知的財産の保護、富裕層相手の実店舗などである。フェイスブックは 20 億人と意義深い関係を持っている。プラットフォームを築き、そこには利用者の個人的コンテンツが収められていて、その人向けのターゲット広告がインターネット上の画面に出てくる。グーグルはどこにでも備わり、あるのが当たり前のような存在として公益企業になった。ブランド名が一般動詞のように使われている。

『現代ビジネス』誌の本年 10 月 27 日ネット配信記事によると、「アメリカ司法省はテキサスなど 11 州と共同で、グーグルを反トラスト法(アメリカ独占禁止法)違反容疑で提訴した」ということにて、成り行きが注目される。

本書には多くの重要な語句がある。その中から私が選択したのは「AI」と「根性」である。

「AI」Artificial Intelligence は人工知能のことである。本書第 8 章〈四騎士が共有する「覇権」の 8 遺伝子〉の中の一つに「AI」を挙げている。その「AI」について、著者は「AI にもバイアスがある」と論じている。「AI」はこの頃のニュースにもよく出てくる。すごい機械だということはある。なぜ「バイアスがある」のだろうか。普通には、収集し選択されたデータ自体にバイアスが存在するからである、と考えてよい。

AI については多くの出版もされている。私が購入した既読のものだけでも、井上智洋『人工知能と経済の未来』(2016 年 文藝春秋)、渡部信一『AI に負けない教育』(2018 年 大修館書店)、松田雄馬『人工知能に未来を託せますか?』(2020 年 岩波書店)、養老孟司『AI の壁』(2020 年 著者と棋士羽生善治など 4 人との個別対談 PHP 新書)などがある。

AI について、この頃の話題の一つは、将棋の藤井聡太二冠であり、ある人との対局で指した一手が「AI 超え」といわれた。藤井二冠は AI を使って研究しているという。その AI は将棋特化の AI であるという想像がつく。将棋の AI に囲碁は打てない。しかし、羽生善治永世七冠は囲碁も強いということである。研究は続いているが、今のところ「汎用 AI」はなく、汎用性が高いのは人間である。

AI は雇用を奪い、産業構造が激変するという予測を出す人もいる。しかし、AI の活用は、お掃除ロボットから農業分野へ、そして兵器にまで及んでいる。雇用を奪うのではなく、大規模工事や農業分野では人手不足を補う方向性も出てきている。

二つめのキーワード「根性」は、GAFA とどう関連するのか? 本書には「根性」が二度出てくる。そのうちの一度目は、第 10 章〈GAFA「以後」の世界で生きるための武器〉の中に出てくる。生き

残るためとして「心理的成熟」、「好奇心」、「何かをなしとげた経験」などを提示している。「根性」は、「ある分野での競争で勝者となること、そのためには何事にもへこたれない根性がある」という文脈中にある。持久力が必要なスポーツとしてボート、体操、水球、陸上は根性を育てる絶好の機会である、としている。私は中学校時代に陸上部に入っていた。その当時の中学生の長距離走をやり、体育の教員に有効な指導を受けたお陰で「根性」が培われたと、今も思っている。胃液を吐くほど走らされたが、体罰とは無縁であった。中学校時代の私は体育会的生徒であった。しかし、今は「根性」など、はやらない。

現在の学校の部活動は、体罰や教員の長時間労働の理由の一つでもある、ということなどから批判にさらされている。体罰をなくして部活動は続く方向であるとよい。そして、本書において、「キャリアを確立しようとしているとき、…(中略)…卒業後の 5 年で…(中略)…できることは努力することだ。とにかく熱心に、一生懸命働く。」(401 ページ)ということに関しては、私は共感を覚える。若い時期に仕事に没頭する数年があつてよい。一生懸命働くという身体的基礎、それが「根性」である。「根性」は精神論ではなく、身体的なものである。

今の社会の中、若い人のことで私が一番心配しているのは、親の収入の高低で大学への進学有無と、どのレベルの大学に進学するのかが決まってしまうかのような論が展開されていることである。また、転職を奨励するかのよう、転職紹介会社が跋扈していることである。入った会社がブラックであれば辞めて当たり前という状況にしてしまう、あるいは辞める理由を「ブラックな職場だから」というようになってきている。命を失うほどとは言わないが、就職先での配属部署に合わせて、我慢強く、根気よく自分の得意を發揮していくということも考えるとよい。

「AI」と「根性」について、少し脱線もした。私が AI にたどり着いたのは、本書より先に、認知科学、脳科学の勉強から「ニューラルネットワーク」が人間の脳を模したものであるということからである。AI については、まだ勉強が続く。先に提示した 4 冊からのキーワードは「汎用」と教育関連における「最適化」である。「根性」は、「我慢強さ」や「根気よく」から「非認知能力」につながるものかと、思案している。

本書は、私にとっては「プラットフォーム」、「テック企業」など多くのカタカナ用語を調べないと理解がいかないところもあり、そこからさらに不明な用語が出てくるということにて、大いに勉強になった一冊である。

会員談話室

会員自己紹介

○宮川隆史 (都立志村学園副校長・マネジメント支援員)

都立高校での 34 年の勤務の後、上海日本人学校高等部校長を 3 年間務め、本年 3 月に帰国、現在は都立志村学園(特別支援学校)の副校長マネジメント支援員として月 16 日勤務しております。もともとは今で言う公民系の社会科の教員でしたが、生活者の視点やジェンダー等への関心が強く家庭科へ転科しました。

教諭前半期はハンドボール指導や進路指導と募集対策等に従事、後半は新しいタイプの授業づくりや学校づくりが主な仕事でした。管理職としては、総合学科や下支えの高校に勤務し、利用者本位の学校改善に取り組みました。上海日本人学校では、高等部の経済的自立のミッションをいただき、上海立地等の特性を活かした学校改善マネジメントを進めてミッションを達成し、＜グローバルダイバーシティ人材育成をめざしたグランドデザイン＞として整理しました。

多様な生徒さんお一人お一人を大切に、利用者を優先して常に改善を続けること等をモットーに学校マネジメントに携わってきたキャリアを活かし、今後とも学校・生徒・保護者・教員支援に関わって参りたいと考えております。よろしくお願い致します。

○小澤貴史（[拓殖大学政経学部](#)・公認心理師）

30年間、大学で学生相談を担当しておりました。たくさんの方と接する中で、今、ここにある状態の多くは、乳幼児期に遡ってみる必要があるのではないかと気付かされることがありました。3年前から現職につき、教職課程及び教養教育で心理学関連科目を担当すると共に、本格的に「人間の危機」を中心とした研究を始動したところです。同時に、大学での心理相談はもとより、中学校（東京都巡回相談心理士）や高等学校（スクールカウンセラー）へも出向き、子どもたちや先生方とのふれあいを大切にしています。

喫緊の課題となります、「コロナストレス」につきましては、公認心理師として「心の健康教育」に資することが求められることから、大学の広報誌及びホームページを通じて、「メンタルヘルスリテラシー：コロナストレスをセルフケアでコントロールする」といった情報を発信しました。行動自粛や急減に変化した学びの形、パンデミックによる恐怖や不安など、ストレスフルな状況が少しでも和らぐことを願っていますし、子どもたちの無限の可能性が、一過性のウイルスによって損なわれることがないように、微力ながら支えていきたいと考えています。そして、今回の感染症対策が、次の新たな感染症が発生した際に活かせるように備えること、震災対応のように「ただちに命を守る行動」として根付くような社会全体を意識しながら探求できればと思慮します。

○佐竹奈美子（子ども支援士）

幼少の頃から自転車を駆使して地域探検をするのが大好きでした。「地理」に出会い、中学校教諭を目指して修士課程を経てその後も学び続けました。結局教職にご縁はありませんでしたが、現在小学校5年・3年生の姉妹の母として、子どもたちと一緒に学びや学校活動を楽しみ、喜々としながら地域に関わっております。

会社員をしておりましたが、教育に関わりたいという気持ちは変わらず、現在は[中小企業大学校東京校](#)で中小企業を支援する立場の方（行政・商工会・焼香会議所等の職員）の研修業務に携わっています。受講者もそして支援される中小企業の社員も「大人」ではありますが、「どういう支援が求められているのか」という根本テーマを議論したり、実際にヒアリングしたりする中で、主体者を尊重することを第一として、寄り添い、情熱を持ち続けて伴走していくことが、社員（人）の人生そのものを支える、かけがえのないものだということを実感します。と同時に、我が子や地域の子どもたちに想いを馳せ、子どもたちにもできうる限りの「適切な支援」をしていきたいと思う毎日です。

本学会で、諸先生方や会員の皆さまから多くのご指導をいただき、一つ・二つと足元で実践してまいりたいと思います。どうぞよろしく願い申し上げます。

○高田茂子（[市原市立海上小学校](#)教諭・こども支援士）

このたび入会させていただきました高田茂子と申します。英語科教員として公立中学校を4校歴任し、小学校勤務となりました。前任校は外国にルーツを持つ児童が全校の約四分の一在籍し、ルーツとなる国は8カ国にも及ぶ国際色豊かな公立小学校で、日本語指導と外国語活動を担当しました。「ワールドルーム」と呼ばれる日本語指導通級教室を毎時間楽しみにし、先に編入して「バイリンガル」となった児童から支援を受け、言葉を獲得していく姿を目の当たりにし、子ども達が持つ柔軟性と適応力の高さを感じました。保護者から「ワールドルームを卒業させないで」という声もあり、日本語指導通級教室が外国にルーツを持つ児童や保護者の心の安定を図る大切な場所であると思いました。

学校の国際化が進む中、日本語指導担当教員の役割をさらに深く学びたいと考え、現職教員として千葉大学大学院で土田雄一先生（実は前任校の校長先生）のご指導の下学ばせていただきました。大学院修了後、本校勤務となり、現在は6年生の学級担任と英語の指導を担当しています。

会員の皆様と交流を深め、児童生徒一人一人の輝きを大切にできる教員になりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

句会 むさしの

○梵鐘の終りの一打冬の星

安田 勝彦

希望という一品煮込むおでん鍋
病床の妻の夢見る冬銀河

秋から冬へ移る季節は、もの哀しくその中に温かさを求める季節でもあります。澄んだ冬の空の星の美しさに暫く留まりたい宇宙があります。これから冬から暮、おでんの中に1年の自分の気持ちを煮込んでください。

○半世紀何ごともなく憂国忌

市原 潤

子らの影無限に伸びて秋日暮れ
現世に葱数多あり日の暮るる

永田耕衣に「夢の世に葱を作りて寂しさよ」の句がある。

黄葉の直下に落ちて闇明るし

銀杏の葉は重く風に散らないので、樹の周囲に円を描いて降り積もる。

○キャラ弁の自慢もできずディスタンス

上島 博

修学旅行日帰りなれどはしゃぐ子ら

私の地元の小学校も、遠足のお弁当をグループで輪になって食べるのではなく、同じ方を向いて一人一人距離を取っていただくようになったそうです。昔ながらのおかずやおやつとの交換は、食中毒やアレルギーの関係で、今はしなくなっていますが、コロナ禍の今年は、とうとうお互いのお弁当を覗くこともできなくなりました。仕方ないとは言え、遠足の楽しみの一つがなくなりました。半面、遠足でいっしょに食べる友だち選びや弁当の見せ合いにストレスを感じていた子は、内心ほっとしているかも知れません。

修学旅行も日帰りになりました。近所の6年生に話を聞くと、「お小遣いを使って買い物したりできるから、みんな楽しみにしている」とのことでした。理不尽な災難になげやりになるのではなく、その時その時の幸せを見つけて、明るく過ごそうとする子どもたちの健気さにうたれました。

○菊白子「ポン酢にするね」と鍋しまう

三輪葉月

大好きな鱈の白子。スーパーの安売りで買ったものの、鍋にするにはこの暖かさ。「湯がいてポン酢白子にしましょうね」と夫との会話。白子は冬に膨らんださまが菊の様に見えます。

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・（ニューズレター委員会：深谷和子）

海外からのお便りが寄せられるなど、今月号もおかげさまで魅力いっぱいの誌面となりました。また、新たに「風の本棚」のコーナーを設けました。書評等の固いものばかりでなく、会員の著作のご紹介をはじめ、話題の新刊書や何かの時に会われた本のご紹介など、学びにもあふれたコーナーに出来ればと思っております。なお今月は、青葉絃宇会員の「継(つ)ぎ接(は)ぎ家族を楽しむ」と板東正則会員の「教育の創造」をご紹介できました。最近の出版事情の悪い中のご同慶の至りに思います。句会「むさしの」にも、みなさま、どうぞ折々のお作をお気軽にご投稿いただければありがたく思います。どなたも、いい新年をお迎え下さい。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2020年12月号目次〉

今月の花 軽井沢の冬～光の散策	細江久美子
今月の詩 「九月の風」黒田三郎	ゆあさとしお
イベント情報	
実践報告 地域活動でできること、今年できたこと	大山光子
ドバイ通信1 ドバイに暮らして	谷野敏子
風の本棚	
① 青葉絃宇「継ぎ接ぎ家族」を楽しむ	石田祥代
② 坂東克則「教育の創造」	渥美卓哉
③ スコット・ギャラウエイ「四騎士が創り変えた世界」	米谷正則
会員談話室	
会員自己紹介	宮川隆史、小澤貴史、佐竹奈美子、高田茂子
句会 むさしの	安田勝彦 市原潤 上島博 三輪葉月
	編集後記 (深谷和子)



黒田三郎詩集「小さなユリと」